

に在籍していたドイツ人でありながら、彼の著作が英語版で最も早く刊行された理由は、イギリス人医師で博物学者でもあったハンス・スローン卿（Sir Hans Sloane, 1660-1753）がケンペルの原稿に着目し、それをいち早く購入して大英博物館が収蔵していたことによるものである。

『日本誌』の構成

内容は版によって若干の異なりを見せているが、主要なヨーロッパ言語による版の中で最も後年の1777-79年に刊行されたドイツ語版のドーム版「*Geschichte und Beschreibung von Japan*」は、ケンペルの没後60年を経た1773年に、彼の姪の遺産から発見された二つの原稿をもとに、クリスティアン・ドーム（Christian Dohm, 1751-1820）が編集したもので、全2巻から成り、その構成は5篇に別けられ、さらに付録を伴っている。



『日本誌』ドイツ語版（ドーム版）初版（本学図書館所蔵）

第1巻には第1篇のバタヴィアからシャムへの旅行とシャム宮廷の現状、日本の地理、気候、動植物などの章、第2篇の日本の政治状態などが書かれた章、第3篇の日本の宗教および神社についての章が入れている。第2巻は第4篇の長崎と諸外国の対日貿易についてなどの章、そして第5篇の15章が入り、2回にわたる江戸参府紀行が書かれている。また、付録は前述の『廻国奇観』中の日本に関する記事で、第1は日本の製紙、第2は鎖国論、第3は病気と針治療、第4は艾灸、第5は日本の茶、そして第6は龍涎香（保存剤・保香剤）についてである。

特に、このドーム版はケンペルの古いドイツ語を編集者であるドームの時代の言葉に改められてはいるものの、原稿に忠実に推敲され「西欧人に日本を正しく紹介した最初の大著」（『洋学史事典』斎藤信）といわれている。

日本語への翻訳

このケンペルの『日本誌』が初めて日本に入っ

たのは、1778（安永7）年であるとされている。これはオランダとの交易で輸入されたものであることから、当然オランダ語版であった。このため、江戸時代後半に入った弘化年間（1844-1848）には、国是とされた鎖国体制を堅持するため、海外情報を積極的に収集していた徳川幕府の命によって、箕作阮甫（1799-1863）ら当時の蘭学者たちが『日本誌』の翻訳を終えていたというのが通説となっている。しかし、幕末の混乱期にこれが散逸したことから、明治13（1880）年に、刊行はされなかったものの坪井信良（1825-1904）によって「*検夫爾日本誌*」として翻訳された。

この著作は英語版の書名が、「*The history of Japan*」となっていることから『日本史』と訳されることもある。しかし、江戸時代に輸入されたオランダ語版はその書名が「*De beschryving van Japan*」であり、「記述」面の要素が強いことや前述の「*検夫爾日本誌*」も存在することから、現在でも『日本誌』と呼ばれることが多い。

離日後のケンペル

話は前後するが、日本を去ったケンペルは1694（元禄7）年にオランダに帰り、ライデン大学から医学博士の学位を受けた。その後、郷里レムゴーに戻ってリッペ伯フリードリヒ・アドルフ（Friedrich Adolf, 1667-1718）の侍医を務めながら著述にいそしんだ。この頃34歳年下の女性と結婚したが幸せな家庭は築けず、家庭的に恵まれない中、65歳で病没したといわれている。

ペリー提督からも高い評価

英語版が刊行されて約100年余りのち、アメリカのマシュー・ペリー（Matthew, C. Perry, 1794-1858）提督は日本遠征のための事前研究にこの『日本誌』を使い、その記述の正確さに大きな称賛（『ペリー艦隊日本遠征記』）を与えている。

こうしたケンペルは、幕末に近い時期に来日して大著『日本』（*Nippon*）, 1832-1852年刊）を記したフランツ・フォン・シーボルト（Franz von Siebold, 1796-1866）と共に、江戸時代のドイツ人日本研究者としての双璧に数えられており、「日本におけるドイツ年2005/2006」にあたって回顧するにふさわしい人物と思われるのである。

おく まさよし（司書・図書館事務長兼管理運営課長）